横浜市立中尾小学校
学校教育目標「なかよく　かがやいて　おたがいに高め合う子」
ＥＳＤを通して育成したい資質・能力
「問題発見・解決能力」「自分づくりに関する能力」「持続可能な社会の実現に資する能力」

１　ＥＳＤを通して育成したい資質・能力の具体（例）　　は連携・協働のパートナー

４年　NPO 法人海の森・山の森
出前授業

４年　臨港パークでの
マイクロプラスチック拾い

６年　学校歯科医の講演

４年生　「総合的な学習の時間」
「４You３R プロジェクト～ゴミバスターズ４３＋２」

本実践では、海の環境問題について探究的なプロセスで課題解決していく姿を目指した。

横浜市資源循環局の方から、横浜市の環境問題や具体的な取組について話を聞いた。実際にどのような問題があるのかを、NPO 法人海の森・山の森の方に教えていただいたり、臨港パークへマイクロプラスチックを拾いにいったりして確かめることができた。

このような体験から、自分たちにできることがあるのではないかと話し合い、学区の清掃や身近な人への周知活動など、自ら行動していこうとする姿が見られた。

６年生　「総合的な学習の時間」
「自分の夢に向かって進もう！～My Dream Project～」

本実践では、自分づくり（キャリア）教育の視点から、インタビューや体験を通して働く人の生き方にふれることで、自身の未来について自信をもつ姿を目指した。

様々な職業の方の生き方や考え方にふれることができるように、東京電力で人材育成を担当されている方や消防士、エンジニアの方などにインタビューを行った。また、学校歯科医の講演も聞き、自身の将来について考えを深めることができた。

このような体験から、卒業文集等で自身の将来について自信をもって語る姿が見られた。

SDGs 委員会「委員会活動」
「フードドライブ活動」

本校では、一昨年度より継続して、SDGs 委員会が中心となってフードドライブ活動に取り組んでいる。食品ロスを減らし資源を大切にしたり、地域と協働して問題に取り組んだりする姿を目指した。

フードドライブ活動を行うために、横浜市資源循環局の方と連絡調整を行って学校内で食品を回収できるようにしているところである。また、回収した食料品を地域の頒布会で出せるように、地域の連合町内会長と連携をする予定となっている。

本活動を通して、資源を大切にするために具体的な問題に取り組むことの重要性を実感している姿が見られた。

２　地域や企業、ＮＰＯなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) 子どもの必要感・切実感

４年の実践「４You３R プロジェクト～ゴミバスターズ 43＋２」では、横浜市資源循環局の方や NPO 法人海の森・山の森の方の話を聞くことによって、環境問題について具体的にとらえることができ、「どうにかこの問題を解決したい。」という子どもの必要感・切実感の伴った問題意識をもつことが引き出すことができた。

６年の実践「自分の夢に向かって進もう！～My Dream Project～」では、様々な業種の方との関わりをもつ中で、「自分の将来について考えて、今後の人生に生かしていきたい。」という強い思いを引き出すことができた。

(2) 対話が生まれる授業

６年の実践「自分の夢に向かって進もう！～My Dream Project～」では、様々な業種の方にインタビューをすることで多くの対話が生まれた。今まで関わりのなかった大人との対話、話を聞く中で考えたことを話し合う子ども同士の対話等、多くの形態の対話を引き出すことができた。

SDGs 委員会の実践「フードドライブ活動」では、資源循環局の方や地域の連合町内会長と連携をする中で、「校内に対してどのように周知していくか。」という問題が生まれ、話し合いを重ねていた。様々なアイディアについて、メリット・デメリットを出し合い、よりよい方法について対話する姿を引き出すことができた。

３　ＥＳＤの価値を引き出すために試行錯誤したこと

(1) 本校の重点研究について

本校では、「なかよく　かがやいて　おたがいに高めあう子」を学校目標に掲げ、その実現に向けて重点研究では ESD の構成概念や問題解決に必要な能力・態度の育成を大切にしている。

その中でも今年度は、「子どもが必要感・切実感をもって学ぶこと」と「対話が生まれる授業づくり」を柱に、生活科・総合的な学習の時間を中心に取り組んだ。

(2) 総合的な学習の時間の単元構想

総合的な学習の時間の単元を構想する上で、探究的なプロセスで課題解決ができる学習の流れになっているか、子どもの活動を適切に評価していただける企業や NPO、地域の方と関わりをもつことができる単元になっているかを大切にした。外部講師を招き、単元構想についての研修も行った。

(3) 重点研授業研の成果と課題

各重点研授業研を受けて、「子どもが必要感・切実感をもって学ぶこと」と「対話が生まれる授業づくり」について成果と課題をまとめた。それぞれの授業について迅速に成果と課題をまとめることで、次回以降の重点研授業研へ生かせるようにした。

４　学校全体（ホールスクール）でＥＳＤに取り組むことによって引き出すことができた価値

以上の取組から引き出すことができたものは、教職員の単元構想に関わる意識の変容である。単元を構想する上において、企業や NPO、地域と連携しようという意識が向上したように感じる。外部機関と連携することで、子どもの学びの質が上がり、「子どもが必要感・切実感をもって学ぶこと」と「対話が生まれる授業づくり」に確実につながるという実感をもつことができた。今後も、持続可能な社会の創り手の育成に向けて、本校の実践を高めるよう努めていきたい。

横浜市立本牧中学校

学校教育目標【「見つめ」「認め」「高める」】

ＥＳＤを通して育成したい資質・能力

「身近な課題の解決に取り組むことで、社会課題へも目を向けさせ、更なる行動化を促す。」

- **人権、平和への認識を上げる　→　世界を知る**
- **「働く」ということへの目覚め　→　目的意識の向上**
- **自らを高めるための進路　→　質の高い教育　など**

１　ＥＳＤを通して育成したい資質・能力の具体（例）　　は連携・協働のパートナー

 	全学年　「留学生との交流」 今、世界はどの方向へ進んでいるのか？自分たちと同じ世代の人たちはどのような文化の中で生活しているのか？人種、文化が異なるけど、しっかり受け止めて人権意識や平和への想いを身につけているのか？ そんな正解のない問題に無意識のうちに触れ、自ら感じ・考えて、グローバルな感覚を身につけていくことを目的とした企画である。横浜市国際学生会館、JICA とのコラボで年間を通じて交流を継続している。本牧の地域としても国際色豊かな地域であり、子どもたちは留学生たちに自然と溶け込み、国境の隔たりが感じられない交流を実現することができた。 留学生の母国での問題を知り、それを解決するために日本に留学し学んでいる姿は、本校生徒にも大きな刺激を与えていると感じている。
 	１、２年　「キャリア学習」 「学習する目的は何か？」「進学するのは何のためか？」「働きがいとは何か？」そんなことを考え、自分を知り、次につなげていく目的で実施した。従来の訪問型の職業体験を一新し、新しい内容を模索している段階である。 今年度は、１年生で職業についての事前学習を行い、まとめとして、パナソニック様のご協力のもと、講演会を実施した。２年生は５社の企業の皆様にご協力いただき、本校で出前授業を開催した。リスクマネジメント、投資、ものつくり、研究販売等、それぞれの企業が世界で今の地位を確立し、経営努力されている一面を感じ、生徒自身がこれからどのような進路を選択すべきか考える礎になればと考えている。
	３年生、全学年保護者　「高校フォーラム」 近隣の進学先（公立・私立・全日制・通信制高等学校、高等専修学校、高等専門学校）25 校に来校していただき、20 分１コマ×３回の説明会を開催した。対象は３年生生徒と全学年の保護者で行った。 目的は、偏差値や大学への進学率だけにとらわれず、進学するという様々な可能性を知るということ、そして保護者が経験してきた時代との違いを保護者も感じ、子供にとって最適な進学とは何かをつかんでもらうことであった。 結果的に、本校の生徒の進学先の数の多さにつながってきていると考察できる。学費等の経済的な負担の問題もあるが、一般的な全日制高等学校のみならず、「高等専修学校で専門知識を学びたい」とか「高等専門学校で５年間じっくりと学びたい」など、進学先選びに変化が表れ始めている。

２　地域や企業、ＮＰＯなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) 常に新しい考えや発想を大切にし、時代の流れを敏感に感じとりながら仕事を進めている企業の方々の仕事に対する姿勢は、我々教員とは明らかに異なっている。

生徒にとって一番身近な大人である教員と異なる社会人の話や雰囲気はとても重要な刺激になっていると考えている。

このような企画が継続されていくことで、我々教員の意識にも変化が出てくることを期待している。

(2) １で示したような企画が生徒に与えた成果は数値的なデータや結果としては、なかなかすぐには判別できないと考えている。日頃の生徒との会話の中に変化が生まれ、最終的には、世界を知った上で、自らについて考え、進路選択につながっていくと考えている。そのプロセスを持続的・継続的に行いながら、尚且つ、毎年必ず企画内容の見直し、変化をつけながら更新していくことが大切だと考えている。

３　ＥＳＤの価値を引き出すために試行錯誤したこと

現在の SNS が普及している時代の中で、子どもたちは、簡単に世界の状況や問題点を知ることができる。ただ、それに関心が低いために、よく理解していないのだろう考えている。もし、子どもたちが関心をもった場合には、教員もそれに応えていけるようにすることが大切である。

このような状況の中で、ESD を教育課程に位置付けるときに考えたことは、問題を見つけ、解決するという前提を、生徒だけでなく、教員側にも刺激を与えてくれる内容にしたということだった。教科書に載っていることをそのまま伝える教員と、教科書に載っていることをそのまま覚える生徒が集まっている学校ではだめだという課題意識である。

生徒は、一人ひとりがキャラクターを発揮しながら、自分の長所を理解し、自らの道（進路）を選択できる。教師は、そのような生徒を認めることができる。このような環境を作り出すことが理想だと考え、試行錯誤しながら取り組んだ。

４　学校全体（ホールスクール）でＥＳＤに取り組むことによって引き出すことができた価値

学校全体で取り組んでいるという意識が教員、生徒にあるかどうかわからない。こちらは何も発信していないからである。

発信し、知らせて、実践したふりをする。それでは価値がないと感じている。行事やイベントを行っていく中で、自然と考え方が変化してきたという流れが理想だと考えている。

ESD を進めていくためには「言われたからやる」ではなく、教師も生徒も自然な流れの中で行動することができたという理想に向かって、企画を進めている。

横浜市立小田中学校

学校教育目標　1．個性が発揮できる学校生活（知）　自ら学び、自分らしさを発揮し、生きる喜びを実感できる生徒を育てます。

2．誰もが尊重される学校生活（徳・体）　自らの心と体を健やかに育み、互いの立場を尊重しあえる生徒を育てます。

3．地域とともにつくる学校生活（公・開）　地域との交流を積極的に進め、地域の一員としての自覚を育てます。

ＥＳＤを通して育成したい資質・能力

「コミュニケーション力」「課題発見・問題解決力」「持続可能な社会の創造に貢献する力」

１　ＥＳＤを通して育成したい資質・能力の具体（例）　　は連携・協働のパートナー

ジャージ登校継続の課題について話し合う姿

生徒が製作したパッケージ

被爆者手帳の訴訟を題材に
核兵器を巡る様々な考え方について説明する生徒

全学年「特別活動」
「議論する生徒総会へ～原稿を読み上げて拍手するだけって意味あるの？～」

生徒会本部役員が従来の「**形式を重視する生徒総会**」よりも、自分たちの生活をより良くしようとする意識を全校で高めるために、当日の意見交換を行う「**議論する生徒総会**」にしたいと提案してきた。普段なら粛々と進んでいたが、自分事として活発に議論する姿が見られた。また、ジャージ登校継続にあたっては、過ごしやすさや着替えの時間短縮といった効率面だけでなく、標準服の意味も理解して継続するために、学生服メーカーに機能や用途について問い合わせたり、チクマ・服育 net 研究所の方から講義をいただいたりした。

２学年「総合」
「杉田梅ゼリーをバズらせろ！」

地域にある「杉田梅」を題材にパッケージを製作する実践。後世に杉田梅を残そうと活動する横浜 旬・菜・果の方から生産への想いや梅の特徴を伺い、美術科を中心に教科横断的に学びながらパッケージを作成した。そのうえで、杉田梅の商品を扱っているスーパーマーケットのスズキヤさんと連携して実際に選んでもらい、店舗での販売につながっている。生徒たちは自分たちで定めた商品のターゲット層に届くために、どのような課題があり、どう工夫すればよいかを話し合う姿が見られた。

３学年「総合」
「平和のために何ができるか」

修学旅行の事前、事後学習の中で、平和学習を探究的に行った。生徒は、長崎で被爆者から直接お話を伺ったり、政治家と手紙のやりとりをする中で、「戦争は良くない」「平和のためにできることを考えようと思った」といった道徳的な認識にとどめるのではなく、戦争の悲惨さを心で理解しながらも、現状を批判的に分析したり、安全保障を多面的・総合的に捉える姿が見られるようになった。また、自国だけで平和は成立するのではなく、他国との連携が必須であり、あまりの複雑さに思考停止することもあった。しかし、粘り強く探究をすすめ、少しずつ理解・思考を深めていった。

２　地域や企業、ＮＰＯなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) 説得力、専門性の向上

> 原爆の被害は自分も Youtube とかある程度知っていたつもりだったけど、それを実際に体験した人の話は迫力が違った。（生徒の感想）

平和学習の実践では、被爆者の体験や想いを直接聞くことにより、ネットや本から得られる知識以外のことも感じているようだった。この体験が、その後の主体的な探究活動につながった。

> 自分たちや先生たちが伝える言葉だと、「そうは言っても…」という反発が起こったりする。だから専門家からの発言はみんなもより受けとめてもらえると思う。（生徒会本部役員の発言）

生徒総会の実践では、ジャージ登校という生活指導にも関わる内容がある。「マナーやルールを守る」ということは生徒もわかっているが、なんとなく教員からの言葉は形骸化してしまう場合がある。しかし、服育 net という専門家の言葉では、学校内の人とは違う言葉として説得力をもって伝えられると感じている。

(2) 社会とつながり、学ぶ意味を実感

生徒にとって学校での学びは「成績のため」にやるものであり、何のためにやるのか分からないと感じている場合もある。しかし、社会につながることで、学ぶ意味を感じることができた。杉田梅の実践では、実際に製作したパッケージが地元のスーパーに並ぶのである。そこで消費者の手にとってもらえるかは、いかに自分たちが魅力的なパッケージをつくるかにかかっているのである。そこで初めて、言葉で表現することや色やフォントの与える印象などを学ぶ必然性が生まれる。各教科でもその内容を学ぶ理由を生徒が感じられるように導入や教材研究を工夫しているが、学校外とつながることで得られる力は非常に強いと感じた。それは生徒の反応を見て教員自身がハッとさせられたことでもある。外部人材と連携・協働することのメリットを感じられるきっかけにもなった。

３　ＥＳＤの価値を引き出すために試行錯誤したこと

いかにホールスクールアプローチにしていくかこの一点に限る。これまでも良い取組を行ってきたと考えているが、それは ESD 推進担当だけで、生徒会本部といった一部の活動にとどまっていた。そこで、どうやって学校全体を巻き込むのか。生徒会本部もその課題を感じていたからこそ、生徒全体に関わる生徒総会を改革しようとした。また、教職員間の差をうめるために、ESD を軸とした独自教科のカリキュラム作成を教員研修で行ったりしている。このような学校全体にかかわる部署で ESD について考える機会を作ることで、意識合わせが少しずつ進んでいる。

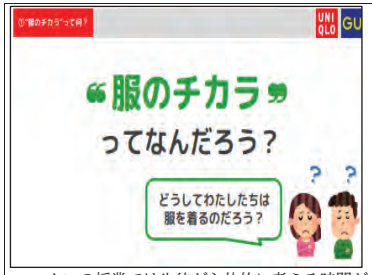
ESD の視点から内容と資質・能力をどう各教科でつなげて独自教科を作成するかを考える研修

４　学校全体（ホールスクール）でＥＳＤに取り組むことによって引き出すことができた価値

ESD の生徒交流会で生徒会長が「**僕たちにとっての ESD は当たり前を疑うことです。今回はジャージ登校から標準服の意味やルールの必要性について考えています。でもこれを拡大して考えていけば、環境とか平和とか地球のことを『このままでいいのか』と疑う姿勢につながっていくと思うんです。それが持続可能な社会をつくっていくことにつながると思うんです。**」と語っていた。この発言が成果である。また、ESD につながる杉田梅のような実践も出てきた。このような取組を今後も広げていきたい。

横浜市立中川西中学校
学校教育目標「自立と貢献」「健康と思いやり」「対話と融和」
ＥＳＤを通して育成したい資質・能力
「問題解決能力」「自己理解と他者理解」「コミュニケーション力」

１　ＥＳＤを通して育成したい資質・能力の具体（例）　　は連携・協働のパートナー



ユニクロの授業では生徒が主体的に考える時間が設けられた

ポスターを作成し、全校へ呼びかけた

コスモス祭当日！多くの服が寄付された

キャップフェス啓蒙ポスター

全学年・ボランティア同好会「総合的な総合の時間」
「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」

本校卒業生が昨年度横浜市のピースメッセンジャーとして、国際連合本部（ニューヨーク）を訪ね、今後の世界のために私たちに何ができるかを考えた。卒業後の活動になってしまったが、在校生へと活動を引き継ぎ、今年度の７月にユニクロ・GU より講師を招き、Google classroom を活用し講演会を開いた。

「服のチカラ」とは何か、回収された服がどのように活用されていくのかを、クイズや動画を用いて主体的に学ぶことができた。授業を通して、自分でできることには取り組んでみたいと考える姿が見られた。

夏休み明けからはボランティア同好会を中心に有志も募り、服の回収プロジェクトが始まった。全校生徒へのアンケートなどを参考に、10 月に保護者主催で行われているコスモス祭という行事で服の回収を行った。PTA にも協力していただき、多くの服を回収することができた。11 月にユニクロ・GU に回収品を収め、今回のプロジェクトを終了した。

活動を通して SDGs の目標である「つかう責任つくる責任」について主体的に学び、実際に活動することができた。他校でも取り組んでいるがなかなか継続するのが難しい、という声も聞き、どのように「持続可能な活動」にしていくかを今後検討することが必要である。

全学年・生徒会
「エコキャップ回収フェス」

以前からペットボトルのキャップ回収を本校では行ってきたが、生徒会本部ではどのようにしたらさらに全校生徒がキャップ回収に協力できるかを考え、定期的に「キャップ回収フェス」を始めた。テーマを決め、キャップを投票権として活動を進めている。PR 動画を作成するなど全校生徒への意識づけも行っている。回収されたキャップは回収業者を通じて、ワクチン代として寄付している。

２　地域や企業、ＮＰＯなどとの連携・協働により引き出すことができた価値
Think Globally, Act Locally

(1)「服のチカラプロジェクト」を振り返って

ここ数年間、総合的な学習の時間を通して SDGs について理解を深めてきた。今までは世界や日本の状況について思考する場面が多かった。今年度は学んできたことを活かし、ユニクロ「服のチカラプロジェクト」に参加し、実際に活動を行うことができた。知識を得るだけでなく、自分たちに何ができるのかを考える機会となった。

生徒感想文より

今日の授業を受けて、どのように服が届いているかを知ることができ、安心しました。もっと効果的に難民へ服を届ける術を考えてみたいと思いました。

自分の着られなくなった服を渡すだけで１日１日の生活が変わっていくならすぐに協力したいです。

(2) 生徒会新聞での啓発活動

月一で発行されている生徒会新聞の裏面には、各 SDGs の目標の解説や今の自分たちにできることを掲載している。

３　ＥＳＤの価値を引き出すために試行錯誤したこと

ICT を活用し、個別最適で、創造性を育む教育

これからの Socity5.0 時代の中で、個別最適な学びの効果的な支援が必要となる。今までは各学習の取組として、紙媒体で行われることが多かったが、プロジェクト型学習を行うことで、ＥＳＤを通して育成したい資質・能力の「問題解決能力」「自己理解と他者理解」「コミュニケーション力」を育むことができるようになってきた。また、読み書きに苦手意識がある生徒などもデジタル機器を使用することで、まとめ学習などを平易化することができた。「誰一人取り残さない」という視点においてもデジタル機器を使った授業は有効的である。昨年度よりもデジタル端末の有効的な使い方を教員間で共有し、行事の事前事後学習や授業の中で Google classroom 等が積極的に活用されるようになってきている。また、Google スライドの共有機能を使用することで今までは難しかったグループでの作業も行うことができ、着実に生徒たちの表現能力も向上している。

４　学校全体（ホールスクール）でＥＳＤに取り組むことによって引き出すことができた価値

Chromebook の導入によって、同学年の横のつながりだけでなく、縦の繋がりも生まれ、より良い教育活動ができている。例えば、生徒たちの作品をクラスだけでなく、学年を越えて共有できるようになり、「持続可能」かつ「より完成度の高いもの」を作りあげることができるようになってきた。

委員会活動でもデジタル機器が活発に使われるようになり、ペーパーレス化も図られている。今までは印刷など細かなところに時間が割かれ、担当職員の負担も大きかった。また、職員だけでなく生徒達もアンケートの集計などにも膨大な時間を要していた。しかし、デジタル機器の使用によって、データを簡単に共有できたり、整理できたりすることで、活動や仕事の負担も軽減され、持続可能な取組につながっている。また、ペーパーレス化によって余分な紙を使用することが減り、SDGs にも貢献することができている。

文化祭では３年生が修学旅行の事前事後学習をスライドを活用し、発表した

横浜市立相沢小学校

学校教育目標「学びあい　認めあい　支えあい　　夢をはぐくむ　あいざわっ子」

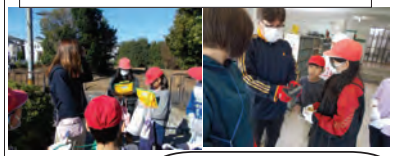
ＥＳＤを通して育成したい資質・能力

「自分の考えをもつ力」「思いや考えを表現する力」「伝え合うことで自分の考えを深化させる力」

「進んでコミュニケーションを行う力」

１　ＥＳＤを通して育成したい資質・能力の具体（例）　　は連携・協働のパートナー

地域の方や技術員さんへインタビュー



２年生「生活科」

「やさいとおもちゃでがんばUP！どうぶつランド２年生」

生活科を通して、身近な学習経験の中から「野菜」と「廃材のおもちゃ」の二つのチームに分かれて活動した。「野菜グループ」は地域の野菜博士と交流を積みかさね、野菜の栽培に興味をもち、進んで気付きを伝え合おうとする力が身についた。「おもちゃグループ」は身近な廃材を使った遊びの楽しさを実感し、試行錯誤しながら交流することで伝え合おうとする力が身についた。

６年生「総合的な学習の時間」

「レベルアップ６年生！私たちの未来を守るために私たちができること！」

６年生は、ＳＤＧｓについて、興味や関心をもったテーマについて調べ学習を進めた。飢餓やジェンダー、エネルギー問題、海洋汚染、福祉と様々な分野に分かれて、「現状」「行われている取組」「私たちができること」の３つの段階に分けて調べた。身近な相沢のまちにも焦点を当て、ＳＤＧｓをより身近な課題として捉え、課題解決をするために、自分たちができることを、グループで話し合った。地域にある社会福祉協議会の方に協力していただき、車いす体験を行ったことで、障がい者の方々の視点に気付き、活動が発展していった。学習を通して学んだことを、下級生にもわかりやすい言葉や資料を作成して、相手を意識した伝える力を身につけてきた。

個別支援学級「生活単元学習」「総合的な学習の時間」

「一人ひとりがハッピースター☆～みんなニコニコ大作戦！～」

個別支援学級では、２つのグループに分かれて活動を行った。「理想の相沢のまち」をテーマに、総合的な学習の時間の時間で「公園環境」「交通安全」「身近なきまり」について調べた。地域の人や児童支援専任にインタビューをしたり、実際に公園や地域の道路へ行き調査したりした。活動を通して、自分たちの住んでいる地域に関心をもち、「誰もが安心して楽しく暮らせるまちしよう」という考えがもてるようになった。公園環境グループでは、拾ったごみの分別を行う際に、技術員さんに分別の仕方を教えてもらった。自分たちの考えを校内の友達や家の人だけでなく、地域の人たちにも広めるにはどうしたらよいかを考えるようになり、発信する手段や活動内容を工夫しようとする力が身についてきている。

２　地域や企業、ＮＰＯなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1)　繰り返し交流することで見られた価値

２年生の生活科では、野菜の栽培活動を通して、地域の方と交流を重ねてきた。野菜づくりで出てきた疑問を地域の方に質問し、分かったことを自分たちの活動に生かした。その中で、交流をしてきた地域の方を「いろいろな人に知ってもらいたい」と、あいざわっ子発表会で発表した。国語の「お話の作者になろう」の学習を生かし、子どもたちからのアイディアで地域の方を主人公にした物語を考えた。

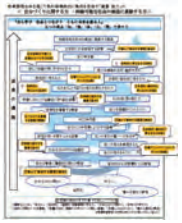
今回地域の方との連携を通して、学習やものごととの繋がりを意識して自分たちの活動を考える姿が見られた。また、繰り返し交流することで、自分事として捉え、進んで参加する態度が育ってきた。さらに、活動の過程で友達や地域の方と協力しながら、活動に取り組む力を身につけていった。

(2)　今年度の活動で引き出せなかった価値

活動の幅がなかなか広がらず、校内だけで活動が完結してしまった取組も多くあった。その結果、子どもたちの取り組む姿勢に積極性が欠けてしまった。(1) で表記した活動とは異なり、自分事として捉えられず子どもたちに「やらされている感」が出てしまい、活動の目的やゴールが明確にもてずに活動してしまったためだと考えられる。子どもたちが活動を自分事として捉えられるよう、教職員がものやことと繰り返し関わる時間を十分に確保したり、振り返りを生かして次の活動を計画したりする必要がある。また、子どもたちが様々な人やものなどとつながるよう、計画的に指導していきたい。

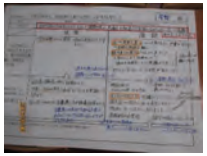
３　ＥＳＤの価値を引き出すために試行錯誤したこと

(1)　教育課程全体を通じて教科等横断的に育成を目指す「資質・能力」の見直し



新たにＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する能力・態度を取り入れ、教育課程全体を通して教科等横断的に育成を目指す資質・能力の見直しを行った。学校教育全体でＥＳＤの視点を取り入れた指導を意識的に行えるようにした。

(2)　ＥＳＤ部会と重点研部会との連携



重点研部会と連携し、ＥＳＤの視点を取り入れた授業力の向上を図った。本校の子どもたちに身につけさせたい資質･能力は何かを明確にし、手立てや指導内容を検討した。今年度の育成したい資質・能力を「進んでコミュニケーションを行う力」とし、振り返りでは子どもたちが自分の考えを自分の言葉で表現できていたかなどを話し合った。

(3)　「ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」カードの作成

ＥＳＤ部会では、授業中に教職員も児童も育成したい資質・能力が意識できるよう、「資質・能力カード」を作成に取り組んでいる。まだ実用できてはいないが、検討を進める中で、部会の教職員の意識が徐々に変化し、ＥＳＤの視点を取り入れた授業づくりの考え方や、ＥＳＤへの理解が深まった。来年度は全校で活用できるようにし、学校全体でＥＳＤへの取組がさらに推進していきたい。

４　学校全体（ホールスクール）でＥＳＤに取り組むことによって引き出すことができた価値

(1)　ＥＳＤの推進を図るための校内研修

年度はじめに校内研修を行い、ＥＳＤとは何か、本校で育成したい資質・能力はどのようなものかを教職員全体で共有した。各学年のＥＳＤカレンダーを見ながら、どのような教育活動を設定していくか、どのような教科等でどのような資質・能力が育成できるのかを話し合った。昨年度から始めた研修で、徐々に教職員へのＥＳＤの理解が深まってきた。今後はよりＥＳＤの視点を意識した指導が全教職員で行えるよう、引き続きＥＳＤ部会を中心に情報の発信や研修を実施していきたい。

横浜市立旭小学校

学校教育目標「思いをもつ力　関わる力　やりぬく力」

ＥＳＤを通して育成したい資質・能力

「思いをもつ力」「やりぬく力」「関わる力」

１　ＥＳＤを通して育成したい資質・能力の具体（例）　　は連携・協働のパートナー

保護者の方や地域の方に総合の取り組みを発表する姿

保護者会福祉協議会の方の話を聞く姿

３年生　「総合的な学習の時間」

「三角公園を盛り上げよう」

本実践は、「まちを明るくしよう」という意識をもち、公園愛護会、消防署、地域活力支援施設と協力して地域を盛り上げるイベントの企画・運営を行った。イベントでは、ランタンを作って公園に飾ったり、地域に関するクイズを作って、ポイントラリーにしたりした。多くの地域の方々が来てくれたため、模擬店の手伝いなど意欲的に行い、様々な人と関わることができた。「イルミネーションイベント」では、竹ランタンを設置したり、クラスの総合的な学習の時間で取り組んでいることを発表したりした。この経験から、自分たちも地域の方々と一緒に活動できることや自分たちの行動で地域を盛り上げられることを実感した。

４年生　「総合的な学習の時間」

「自分たちで考えるユニバーサルデザイン」

本実践では、様々な立場の人になってみんなが過ごしやすくするために自分たちに何ができるか考える活動をしてきた。活動では、社会福祉協議会の方と盲導犬と生活している方にお会いし、お話を伺うことで様々な視点があることに気付き、新たな課題意識や様々な立場の人に対する思いをもつことができた。また、ＵＤを追究したオリジナル商品を開発している企業の方のお話を聞き、商品を試してみることを通して、身の回りのものがＵＤかどうかを考えてみたり、自分たちだったらどのようなデザインのものを開発するかを想像したりすることができた。さらに、グループで自分の案を共有することでよりよくしようと意見を伝え合う姿も見られた。

４年１組　「総合的な学習の時間」

「旭活性化委員会 Ver2　『あさまる』」

本実践は、昨年度の６年生の「鶴見西口活性化」活動に刺激を受け、自分たちで学校をよりよくしたいという思いから活動が始まった。情報を発信していくことが活性化に繋がると考え、鶴見の情報を発信するポータルサイト「これつる」の編集長に思いや情報発信の工夫を伺った。この活動を広めるために、はまっこ未来カンパニープロジェクトにも参加している。情報を発信する場をつくる体験を通して、学校内外の関わりを強めるためには、学校や地域のために力を尽くしている方と協力し、その思いを理解、共感することが大切であることに気付き、その結果、学校を創る一員であることを自覚することができた。

５年生　「国語科」

「新１年生の保護者に向けて、旭小のいいところをスピーチで紹介しよう！」

５年　取材対象を広げて、インタビューをする姿

本実践では、保護者への事前アンケートをもとにスピーチの内容を設定した。本当に伝えたい相手からリアルな声を受け取ることで、よりスピーチの質を高めたいという思いや、自分のスピーチで人の心を動かしたいという意欲を引き出すことができた。また、養護教諭や児童支援専任教諭、１年生担任や児童へと取材を重ねる中で、自分で文章の構成を見直したり、友達と互いのスピーチを見合ったりし、聞き手のニーズに合うスピーチの構成になっているか話し合う姿も見られた。この経験で身に付いた力や人との関わりで深まった学びを生かして、よりよいスピーチの完成を目指し、新１年生保護者説明会に参加してスピーチを行った。

２　地域や企業、ＮＰＯなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) 地域とのつながりをもつ

３年生の有志で「あさひキッズ愛護会」という団体を立ち上げ、まちのためにできることをしようという活動を行った。７月には地域の公園で行われた「たなばたまつり」の企画・運営に携わり、12 月には「イルミネーションイベント」を同公園で行った。どちらも「地域とつながりを広げよう」という趣旨で行った。

(2) 地域とつながることで引き出せた価値

活動を通して子ども達は「自分もたくさんの人とつながることができた」「自分の思いを形にすることができた」等の価値を見出すことができた。一緒に活動してくださった地域の方からは、「子どもの力に驚かされた。私たちももっと頑張ろうと思った。」「挨拶をしてくれる子が増えたことで、つながりを感じた。」「もっと一緒にできることはないかを考えたいと思った。」というお声を頂き、一緒に取り組むことで、よりまちのためにできることを「一緒に」考えていくという意識が強まったと感じた。

３　ＥＳＤの価値を引き出すために試行錯誤したこと

(1) ＥＳＤの視点を入れることで見えたもの

本校では、今までにＥＳＤについて深く考えた経験がある教師が少なかった。そのため、ＥＳＤに取り組んではいるが、意識できずにいたり、ＥＳＤを積極的に取り入れたりすることが難しいという課題があった。そのためにまず、研究授業の指導案にＥＳＤの視点を示し、ＥＳＤを意識化することから始めた。ＥＳＤの視点から具体化した子どもの姿を示し、目指す姿を選択できるようにして、負担感なく意識化できるようにした。また、ＥＳＤの視点を指導案に示すことによって、授業に取り入れやすい視点と取り入れにくいと感じている視点が明確となった。今後は、教師の意識化とともに、教師たちがどのような方策で子どもの思考や行動を価値付けていくかというところにも重点を置いて取り組んでいきたい。

４　学校全体（ホールスクール）でＥＳＤに取り組むことによって引き出すことができた価値

(1) 重点研究

教員一人ひとりの「違い」を前提とした授業づくりを行った。教員それぞれが設定した「課題」を共有した上で、学校教育目標を達成するための研究授業を行った。

指導案検討の際には、共同研究者として講師を招き、一緒に単元構想を練った。その際に、「違い」を前提として、個人が設定した課題を達成するために、大切にしたい思いを共有し、自分らしく学校教育目標の具現化ができるように研究を進めた。これによって授業者に寄り添った授業づくりを行うことができた。また、一人ひとりの違いを前提とすることで、その人が大切にしている価値を知ることができ、新しい視点を得られることができたと考えている。

横浜市立本牧南小学校

学校教育目標「元気いっぱい　やさしさいっぱい　何でもチャレンジ南っ子
～ふるさと本牧を担う子どもの育成～」

ＥＳＤを通して育成したい資質・能力

「課題解決力」「確かな学力と丈夫な体」「地域や社会とのつながりを大切にする心」

１　ＥＳＤを通して育成したい資質・能力の具体

学校教育目標とＥＳＤを通して育成したい資質・能力とのつながり

・自ら問題を解決しようとする、実践力のある子ども
・知識・技能の基本を習得し、健康な体をつくる子ども
・地域等の人とのつながりやものを大切にする子ども
・社会の変化に関心をもつ子ども

○校内教職員向け ESD 研修会
（ESD 推進委員長が実施）

○重点研究における授業の充実
・学級経営の充実・問題解決的な学習の充実
・子ども同士の対話を大切にした授業
・言語活動の充実

○学校図書館の機能の拡充

学校図書館を「読書センター」「学習・情報センター」として学年・教科等の横断的活用を重要視。子どもたち・教職員にとって重要な情報が集まる「情報発信基地」として SDGs に関することを多角的多面的に発信。

（令和５年度子どもの読書活動優秀実践校　文部科学大臣表彰）

○AI ロボット「LOVOT」の導入

子どもたちの人権的な心を育む入り口として、学校図書館に AI ロボット「LOVOT」を常設。

○今までの「シトラスリボンプロジェクト」とアクセシブルな本の普及を目指す「りんごプロジェクト」を合わせた**「シトりんプロジェクト」を令和５年度からスタート**

３年生　総合的な学習の時間
～本牧のまち　にこにこ　大作戦～

「シトりんプロジェクト」をベースに総合的な学習の時間でふるさとのまちを思う取り組みを展開

（1）りんごプロジェクトとの出会い

文部科学大臣表彰をきっかけに、学校図書館では読書バリアフリーへの関心をさらに高め、SDGs 情報発信基地としての機能を充実させる取組をスタートした。その導入として、アクセシブルな本の普及を目指す「りんごプロジェクト」の講演会を実施した。

（2）まちたんけん

子どもたちは、老人ホーム・幼稚園・市立図書館への訪問を通して、自分たちが多くの人に支えられていることに気づくことができた。

（3）中区ブックフェスタへの参加

～来てみて知って本牧南小学校図書館　シトりんプロジェクトはじめました～

ふるさと「本牧」のまちから発信する学校図書館の紹介と３年生が総合的な学習の時間から学んだ思いを発表した。

りんごの棚

２　地域や企業、ＮＰＯなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

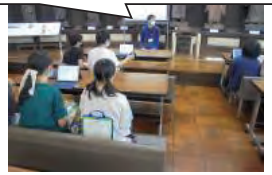
(1) 地域や企業との協働

子どもたちが地域や企業の方と連携・協働しながら学習できるよう日々工夫を重ねてきた。

下の表にあるように、全学年で地域や企業の方と関わる機会を意図的につくっている。

１年	年長さんと楽しむぞ大作戦（生活科） ・横浜本牧駅、近隣保育園・幼稚園　他
２年	本牧のまち　たんけんたい（生活科） ・本牧市民プール、八聖殿　他
３年	本牧のまち にこにこ大作戦（１組）（総合） ・リアンレーヴ本牧　他 のり名人になろう！（２組）（総合） ・須藤海苔店　他
４年	地域で受け継がれてきたもの（社会科） 作戦 530（総合） ・資源循環局　他
５年	食べて運動　5-1 オリジナル SDGs（総合） ・横浜中央卸売市場、八聖殿　他
６年	Let's　本牧 LOVE32 ～めざせ！スタプレ動画 No.1～（総合） ・市営バス本牧営業所、第一金属工業
個別	野菜を育て、おいしく食べよう！ （生活科）

八聖殿郷土資料館　館長　相澤さん



本牧のまちの歴史をよく知る相澤さんとの交流を通して、子どもたちはまちへの愛着を深めたり、まちのよさに改めて気付いたりすることができた。（６年　総合的な学習の時間）

(2) 地域との関わりから得た価値

児童参加型の地域防災拠点訓練

教科学習だけでなく、行事においても積極的に地域と関わる機会を作った。地域と関わることは、「人と出会う・つながる」ことでもあると言える。様々な人の営みに触れ、その人たちの思いや願いに共感したり、感動したりする経験は、子どもたちにとって大きな価値がある。

３　ＥＳＤの価値を引き出すために試行錯誤したこと

重点研究推進の視点から

(1) 問題解決的な学習の充実

どの学習においても、子どもたちの「どうしてだろう。」といった問いや「やってみたい。」「調べてみたい。」という思いや願いをどう引き出すか、日々試行錯誤している。子どもたちの主体的な学びを実現するために、今後も研究を深めていきたい。

(2) 子ども同士の「対話」の充実

(1)で述べた問題解決的な学習を積み重ねる中で、最も重要になってくるのは、「対話」であると考える。中でも本校が注目したのは、子ども同士の対話である。「聴き合い」をキーワードにして、お互いの考えをじっくり聴き、それに反応することを大切にしてきた。それにより、他者の意見も取り入れながら、よりよく問題解決を図る力が身に付くのではないかと考えている。

４　学校全体（ホールスクール）でＥＳＤに取り組むことによって引き出すことができた価値

(1) 教職員一人ひとりの「自分ごと」が向上

夏の校内 ESD 研修で、教職員一人ひとりが VUCA（予測不可能な時代）における理想の学校像を考え、それを ICT を活用して全体で共有した。それによって ESD に対する理解が深まり、当事者意識が高まるとともに、持続可能な社会の創り手を育成するための学校の役割について具体的なイメージをもつことができた。

(2) 学校全体の「ESD 意識」が向上

本校の ESD 発信基地が学校図書館であることから、全校児童が SDGs やインクルージョンについて日常的に触れることができ、その理解や意識が高まってきた。(1) の教職員の当事者意識の向上と相まって、教科等学習の内容だけでなく、様々な教育活動を ESD の視点で見直したり価値づけたりする様子が見られるようになってきた。

横浜市立新井中学校

学校教育目標「自立・共生・学び合い」

① 自分のよさを知り、なりたい自分を見つけます。（知）

② 相手のよさを認め、励まし合い、地域と共に生きる人を育てます。（徳・公）

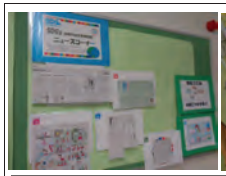
③ 命の大切さを知り、持続可能な社会を共に創る心と体を育てます。（体・公）

④ 思いやりのある、親切な行いを実践し、社会に貢献できる人を育てます。（開）

ＥＳＤを通して育成したい資質・能力

「共に生きる力」「想像する力」「実践する力」

１　ＥＳＤを通して育成したい資質・能力の具体　　は連携・協働のパートナー



図書館前のＳＤＧｓ掲示板。初めは時間がかかりましたが、今では、手早くＳＤＧｓに関連する記事を探すことができるようになりました。

少し時期遅れに植えたヒマワリの苗ですが、夏休み明けには、見事に咲き誇りました。

今年は、グリーンサポーターの方と時間を合わせての活動はできませんでしたが、学校の花壇を手分けして整備することができました。右下の写真は、来年度に向けて、個別支援学級の生徒がヒマワリの種を選別しているところです。

図書委員会

図書委員会での具体的な取組として、ＳＤＧｓ関連図書の購入、展示、推薦ポップの作成がある。また、図書委員の生徒が新聞から、ＳＤＧｓ関連した記事を選び、ＳＤＧｓシールによって示したものを掲示することにより、生徒に周知していく活動を行っている。

環境保健委員会

地域学校協働本部と連携して、校内の緑化に日々努めてきた。今年度は、季節ごとに花壇の植え替えを行い、色とりどりの植物は生徒、保護者、地域の方を楽しませた。

個別支援学級

環境保健委員会で育てたヒマワリの種を来年度の栽培用に採取した。また、メダカやウーパールーパーの飼育を行い、命の大切さを学びながら、環境問題について考えている。

総合的な学習の時間

ＳＤＧｓと関連したビデオを視聴し、持続可能な社会に向けての意識を高めた。

２　地域や企業、ＮＰＯなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

本校では地域学校協働本部でもあるＮＰＯ法人「Ａ・Ｓ・Ｃ・Ｃ」（新井スクールサポート・コミュニティ・コーディネーター）が、学校と地域を結ぶ学校の応援団として様々な活動を行っている。ＡＳＣＣの活動は、本校の持続可能な教育活動に大きく貢献しているものであり、今回は、ＡＳＣＣとの連携・協働で行った自分づくり（キャリア）教育に焦点を当てて、生徒の感想や、引き出せた価値を紹介する。

○職業体験（２年）

セブン＆アイ・ホールディングス伊藤研修センターにおいて、２年生が職業体験を行っている。職業体験から、企業を通して、循環型社会や持続可能な活動に向けての価値観を学ぶことできた。

（生徒の感想から）

「ドローンを使って買い物困難者の支援を行ったり、食品ロスへの取組で売れ残った食品を肥料にして野菜を作る循環型農業を行ったりしていることを初めて知った。」

「企業理念のひとつである「誠実」というところが、お客様に対する様々な工夫となっていることに気付いた。」

○マナー講座（３年）

講師の方から、マナーや面接の心構えなど、卒業後も必要となることを学ぶことができた。

○夢・応援プログラム（小６・１年）

離乳食作り、薬局調剤体験、空調機設備体験、ドローン体験などを含めて８つの職業体験を小中合同で行いました。体験の楽しさだけでなく、働くことの意義についての気づきが見られた。

３　ＥＳＤの価値を引き出すために試行錯誤したこと

(1) 緑化運動では、花を植えたというだけでなく、地域の方や個別支援学級と連携することで、継続していける活動とした。

(2) 自分づくり（キャリア）教育では、体験に対しての感想だけでなく、ＥＳＤの視点でも振り返る場面を増やす必要性を感じた。

４　学校全体（ホールスクール）でＥＳＤに取り組むことによって引き出すことができた価値

本校では、ＥＳＤに取り組むことが、学校教育目標達成のための手立てのひとつとなっている。

２年生職業体験では、食品ロス削減と循環型農業への取組が、また、小６と中１の夢・応援プログラムでは、空調機設備体験を通じた二酸化炭素排出抑制の企業努力やドローン体験を通じた社会課題解決の取組が「持続可能な社会への貢献（体・公）」「思いやりをもち社会に貢献できる人（開）」に結びついている。

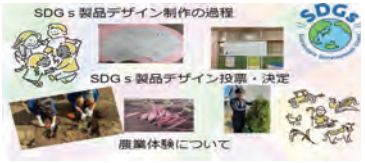
さらに、小６と中１が共に学ぶことで、学年を超えたコミュニケーションをしたり、３年生の面接練習の中で、アドバイスをし合ったりすることは、「自分のよさを知る（知）」「相手のよさを認め、共に生きる人（徳・公）」に結びついている。

今後も、ＥＳＤの視点をもって、様々な教育活動を見直していきたい。

横浜市立南希望が丘中学校
学校教育目標
～挑戦・発信・錬磨～
〇主体的に考え、伝える力と課題を解決する力を高める。【知】
〇人を思いやり、自分や周りを大切にする心を育てる。【徳】
〇様々なふれあいを通し、豊かな心と体を鍛える。【体・開】
ＥＳＤを通して育成したい資質・能力
〇課題解決力・発信力・コミュニケーション力
（「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」）
〇自己肯定感・協働・挑戦する気持ち
（「学びに向かう力、人間性等」）

１　ＥＳＤを通して育成したい資質・能力の具体（例）　　は連携・協働のパートナー

１年間の取組内容



学校保健委員会で各委員会が発表しました

「防災」

まず、SDGs の目標である「①貧困をなくそう」「⑥安全な水とトイレを世界中に」「⑪住み続けられるまちづくりを」「⑬気候変動に具体的な対策を」と防災の関連について学び、「はまっこ防災プロジェクト」のアニメーションを視聴した。

アニメーションでは、実際に横浜で大地震が起きるという内容で、生徒達は「いつか自分が大きな地震を体験するかもしれない」と実感することができた。そのうえで、「（１）地震の歴史と現在（２）地震のしくみ（３）家庭・学校・外出先に潜む危険と備え（４）地震の時の避難（防災マップ）（５）地震の時にとる行動（６）地震と被害」のテーマでそれぞれ自分が興味をもったことを調べ、まとめ、発表を行った。１年生は新聞づくりを行い、３年生は Google スライドでまとめた。

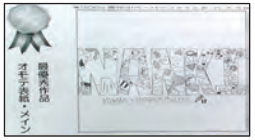
次に HUG ゲームを行った。HUG ゲームを通して、災害時要援護者への配慮をしながら体育館割りを考え、炊き出し場や仮設トイレの配置などの生活空間の確保など、出来事に対して思いのまま意見を出し合ったり、話し合ったりしながら避難所の運営を学んだ。

２　地域や企業、ＮＰＯなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) ペーパーファイル製作

ステークホルダー交流会にて、株式会社 kitafuku さんと出会い、その後の交流の中で、協働できることはないか話し合い、「クラフトビールペーパーファイル」を作成することになった。

生徒たちは早速、全校にデザインを募集して投票を行った。たくさんの投票の中から４点のデザインを選んだ。今年度も「企業と一緒に何かできるんだ！」が実現できたことで、来年度は「何ができるのか」「何かしたい」と思えていることが価値だと考えている。



(2) 旭区農業体験

５月から 11 月まで、保健委員会の代表の生徒たちが農業体験に参加した。苗植えから始まり、つる返しや草取り、畑見学、食育講座、さつまいも収穫、料理教室と地域の様々な方たちと交流を深め、たくさんのことを教わりながら、普段なかなかできない貴重な体験を通して農業について学ぶことができた。

生徒は、「野菜や果物の一つ一つが農家の方たちの丁寧な作業を経て、私たちの口に届いているのだなと思いました」「食の原点を知り、食の大切さ、ありがたさを知りました」といった感想をもつとともに「無駄なくすべて食べられるものなんだ」ということも知り、SDGs とのつながりを感じていた。

３　ＥＳＤの価値を引き出すために試行錯誤したこと

SDGs への取組について、南希望が丘中学校が大切にしていることは、「みんなで考え、みんなで行動する」である。

３年目になる「服のチカラプロジェクト」、２年目になる「レッドカップ販売」や「コンタクトレンズケースの回収」、そして今年度行った「文房具の回収」。これらの活動は、ただ「行う」だけでなく、まずはみんなで「知る」「考える」ことから始め、それを踏まえてみんなで「行動」している。推進校として３年目を迎えた今年度も、このような姿がたくさん見られた。

そして、今年度はその取組が、さらに学校内、学校外へ「広がり」はじめた年にもなった。

まず、生徒会の各常任委員会では、年間の活動目標を SDGs の達成につながる目標を設定した。「ホールスクール」による取組へ、一歩踏み出すことができた。

また生徒会本部が、中学校ブロックで行った横浜子ども会議で、学区の小学校２校へ「服のチカラプロジェクト」の協力を呼び掛けたところ、両校ともにプロジェクトに参加することになり、子ども服の回収ボックスを両校に設置することができた。南希望が丘中学校の SDGs の取組の一つが、小学校の児童や保護者にも伝わったと感じている。また、地域にも「南希望が丘中学校は、SDGs に取り組んでいる。」ということが徐々に広がり、レッドカップ販売や文房具の回収に、協力してくれる地域の方々が増えてきている。

さらに、ステークホルダーとの連携・協働の一環として、今年度はペーパーファイルを作成した。昨年度のエコバックと同様に、デザインは生徒から募集し、今年度も価値のある取組ができた。

４　学校全体（ホールスクール）でＥＳＤに取り組むことによって引き出すことができた価値

SDGs 達成に向けた取組は、学校内だけで完結するものでなく、取組を進めていけばいくほど、学校外の人たち、つまり「社会」と繋がっていき、それによって関わる生徒たちの学びもより広く、そして深くなっていく。そこで必要なのは、生徒たちが関わる範囲をより「広げる」ことである。今年度の南希望が丘中学校の取組は、そのスタートの年になったといえる。

来年度は、今年度以上に様々な人たち、そして「社会」と繋がり、生徒たちの学びがより「広く」「深まる」よう、SDGs 達成に向けた取組を進めていきたいと考えている。

横浜市立豊田小学校
学校教育目標「豊かにかかわり、じっくり考える　キラッと☆かがやく豊田っ子」
ＥＳＤを通して育成したい資質・能力
「問題を発見する力」「試行錯誤する能力」「協働的に行動する姿勢」「好奇心」
「他者を理解する態度・自己を理解する姿勢」「伝え合うことで自分の考えを深化させる力」

１　ＥＳＤを通して育成したい資質・能力の具体（例）　　は連携・協働のパートナー

季節に合った食べ物は何かな。

自分に合っためあてをきめるぞ！

横濱アイス工房のアイスクリームはこんなにおいしんだな。

私たちの考えた大豆のアイスクリームを絶対、商品化するぞ！！

命を大切にするためには、どんな考えが必要だろう。

生命のかけがえのなさについて一人ひとりが真剣に考えていましたね。

２年生　「学級活動」
「旬な食べ物を知り、え（いようゲット！）っ（よくて元気になる）グ（ッド）な体になる食べ方をきめよう。」

本実践では、夏野菜、冬野菜を育てた経験と日々の給食の摂り方について、掛け合わせて食育学習につなげた。生活科では自分の育てたい野菜を育てるために、調べ学習をした。給食では、どの子も自分の食べることができる量がわかり、苦手なものも一口食べたり、なめてみたりしている。野菜ごとに育てる時期が違うことから、野菜には「旬」があることを知り、旬の野菜が体にもたらす良さを栄養教諭からクイズやアクティビティを通して学んだ。それをもとに一人ひとりが自分の課題を見つめ直し、めあてを立てた。

この活動に向かう過程でも、食への意識を高めたり、日々の給食から行事食へ派生したり、SDGs の「２　飢餓をゼロに」という別な価値の絵本にも興味を示し、自分たちにできることを考えたりする姿も見られた。生活科としては SDGs の「12　つくる責任　使う責任」の項目も意識できた。食のテーマに向かっていくだけでなく子どもの視野も広がった。給食ではめあてを意識しながら食べ、家族に伝える姿もあった。

３年生「総合的な学習の時間」
「われら、横浜ダイズスターズ！」

国語科で「すがたをかえる大豆」を学習して、子ども達は、大豆が姿を変えて（加工されて）、身近な食品として食べられていることに興味、関心をもった。

横濱アイス工房長沼工場の見学をきっかけに「大豆のデザートを作ってみては。」という意識が高まった。きなこや枝豆アイスなど６つのグループに分かれ、大豆を使ったアイスクリームのプレゼンテーションを行い、横濱アイス工房の方と協働して新製品の開発を行った。

６年生「特別の教科　道徳」

６年生は、最高学年として児童会活動のリーダーとなる。今年度の学年経営方針を考える際、児童一人ひとりの思いやりの心をさらに育みたいという思いを教員同士で確認した。そうした考えのもと、道徳科では、よりよく生きようとする心情を育てるために、生命のかけがえなさに気付き自分を見つめ直す機会となるように学年で学習を進めてきた。

本授業では、ESD の視点として＜構成概念＞公平性＜能力・態度＞批判的に考える力、多面的・総合的に考える力との関連を意識することで、生命の尊さや、どのように生きていきたいかを考えることを大切にした。また、同じ話であっても、人それぞれに違う経験や身辺環境を通して、様々な角度から生命について考えていることに気付いていた。

２　地域や企業、ＮＰＯなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

３年生の総合的な学習の時間では、地域の企業である小野ファーム、横濱アイス工房と連携・協働を進めた。

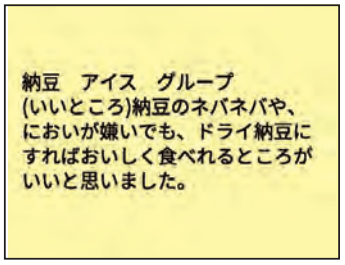
今までも関わりがあり、横濱アイス工房のアイスクリームが給食のデザートに出ることはあったが、今回の取組では、児童たちが考えた大豆アイスクリームのプレゼンテーションを行い、その提案が本当に商品化されるという学習展開につなげることができた。そのことにより、児童たちの本気度が格段にがり、自分たちの考えたアイスクリームが採用されるよう、一生懸命に調べ、提案資料を作り、発表する姿が見られた。

また、提案が採用されるように、グループで協力してロイロノートで大豆に関するアンケートを作成したり、他のグループとは違うその材料の特性を徹底的に調べたりする姿がみられた。

上記の児童たちの様子は、学習カードでつかむことができた。例えば、納豆アイスグループでは、納豆アイスクリームを採用してもらうために、納豆の課題である、においやねばねば感をクリアしようと意欲的に調べたことが分かった。納豆のにおいを抑えるためには、フリーズドライ製法があることを知り、その方法で納豆のにおいを抑え、アイスクリームとして商品化することができるという案にまとめた。

また、納豆のにおいを抑えた上で、納豆特有のねばねば感については、そのねばねば感をトルコアイス風にすれば、そのまま生かせるという提案に至ったことがわかった。

このようにして、児童たちは、企業の商品開発に直接関わることで、社会参画の意識が芽生えたといえる。



３　ＥＳＤの価値を引き出すために試行錯誤したこと

(1)　昨年度（１年目）は、教師たちが ESD 自体を学ぶことから始めた。講師の先生方に講演して頂き、ESD の基本を教えて頂いた。また、授業研究の教科を生活・総合的な学習の時間に定めて１年目の研究を行っていった。その中で、ESD のどのような要素が入っているのか、児童たちの学習活動の中でどのような価値を引き出すことができるかを模索していった。

(2)　ESD 推進研究２年目の今年は、教科等を定めることなく、いろいろな教科等で ESD の価値を引き出すことに取り組んだ。その取組を通して、特別の教科道徳などいろいろな教科等に ESD の視点が含まれていることを実感することができた。また、講師の先生方からは、普段の授業で教師が ESD の視点を意識して学習を進めることが大切だということを教わった。

(3)　今年度、教科等の幅は広がったが、育成を目指す構成概念や能力・態度は、まだまだ偏りがあるといわざるを得ない。この構成概念や育てたい能力・態度を整理して、系統的に積み重ねて指導していく必要があると感じた。

４　学校全体（ホールスクール）でＥＳＤに取り組むことによって引き出すことができた価値

前述のように、研究の教科等を広げることにより、普段の様々な授業の中で ESD の視点を意識できるようになった。例えば、講師の先生から、特別の教科道徳は従来から ESD の視点が含まれていることを教わり、道徳の授業をはじめ普段のいろいろな教科等でも ESD の視点で授業を行う意識が学校全体で高まった。このことにより、児童達も普段から行っている委員会やたてわり活動、ユニセフ募金などにも ESD の視点で考える姿勢が広がっている。

横浜市立鉄小学校
学校教育目標「人とかかわり 創り出す 笑顔あふれる鉄小 ～まちにふれ、土に親しみ、人から学び、ともにのびゆく鉄の子～」
ＥＳＤを通して育成したい資質・能力
「周りを巻き込んで、他者とともに学ぶ姿勢」「広い視野で物事を見て、自分で判断する力」
「異質な他者への寛容的な態度」

１　ＥＳＤを通して育成したい資質・能力の具体（例）　　は連携・協働のパートナー

ワークショップの様子

バングラデシュのストリートチルドレンの暮らしについて学ぶ様子

６年生　「総合的な学習の時間」
「自分たちにできること」

本校は、地域にも自然環境にも恵まれた学区に位置していて、子どもたちも地域に根付いた生活をしている。学区には農地も多く、入学から卒業までの間に米や梨など、地域の協力者とともに年間を通して多くの野菜を作っている。その活動を通して、人から学び、ともにのびゆく力を育成したいと考えている。

６年生は、平和スピーチコンテストの学習で世界の国々の貧困や児童労働などの問題を目の当たりにして、自分たちにできることは何かを考えて実践に取り組んできた。

活動ではまず、平和スピーチコンテストの学習で、世界の人々の様々な暮らしや社会問題について知り、自分たちの身近な課題や暮らしを変えていくことが世界平和につながるということに気づくことができた。そこで、児童労働に課題意識を持ち、認定 NPO 法人 シャプラニール＝市民による海外協力の会の方のワークショップを通して、バングラデシュの社会課題や児童労働について知ることができた。

ワークショップののち、自分たちにできることについて模索し始めた。①寄付 ②バングラデシュの児童労働について知ってもらう活動 ③フェアトレード商品の販売活動 などの様々な取組について話し合っていった。募金やフェアトレード商品の販売活動は、自分たちのお金を動かすことから、一度はできるものの持続可能かどうかで考えると疑問が残った。よくよく調べてみると、洋服を送る支援をしている団体もあるが、受け取れなくなった洋服の処理や配当など、現地の問題も散見された。

話し合いを重ねる中で、家庭にある日用品を換金して現地支援に回す「ステナイ生活」の取組に参加することを決定した。また、全校児童に伝える活動をし、鉄小学校として取り組むことにした。

２　地域や企業、ＮＰＯなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) 学校教育目標との関連

本校では、「人とかかわり 創り出す 笑顔あふれる鉄小 ～まちにふれ、土に親しみ、人から学び、ともにのびゆく鉄の子～」という学校教育目標を掲げ、地域の方々とともに、子どもたちを中心に、保護者、地域、教職員が一丸となって学校教育目標達成に向けて力を尽くしてきた。特に、総合的な学習の時間、生活科の学習では、地域の方々とともに、稲作や梨、多くの野菜の栽培を通して、30 年以上の長きにわたり実践を積み重ねて来た。子どもたちは、人とのかかわりを通して新たな視点に気づき、学びが深まっていくことを知っている。世界平和に向けて自分たちにできることを模索する中で、ＮＰＯの方と連携していくこと、自然な流れだった。

(2) 第三者視点から当事者へ

児童労働などの解決に向けて、実際に取り組んでいる人の話が聞きたいと考えた。インターネットや、本、雑誌などにある情報は第三者の視点で描かれていたからだ。シャプラニールの方によるワークショップを通して、バングラデシュのストリートチルドレンの生の声を知ることができた。自分たちの日常を振り返り、バングラデシュの子どもたちのそれと比較するというものだった。第三者的視点で取り組んでいた子どもたちは、「自分たちでもできることをしなきゃ」と、当事者側に引き寄せられた。

どのような取組ができるのか、現地のみんなが必要としていることは何か、シャプラニールの方の授業を通して多くのことを学ぶことができた。

３　ＥＳＤの価値を引き出すために試行錯誤したこと

(1) 自分たちの自己満足になっていないか

自分たちにできることを探し、調べ学習や話し合い活動を経て、募金や衣類の寄付、フードバンクなどの活動に参加したいと、方向性が決まった。しかし、「持続可能か」「本当に効果があるか」という視点で考えると、長続きしないものばかりだった。

「皆さんにできること、続けられること、何でもいいです。考えてみてください。」ＮＰＯの方のこの言葉で、いつも「自分たちの力で持続可能かどうか」という視点に立つことができた。様々な活動を調べ、話し合った中から「ステナイ生活」に参加することと、バングラデシュの児童労働の問題を知ってもらうことをしていこうということとなった。

４　学校全体（ホールスクール）でＥＳＤに取り組むことによって引き出すことができた価値

(1) 「誰一人取り残さない」を共有

自分たちの学年だけでなく、全校に広げる計画を立てることで、一人ひとりが自分事としてとらえることができた。南アジアの状況や６年生の取組について伝える資料を作る際には、誰が見てもわかるようする見せ方や、少しでも協力しようと思ってもらえるような工夫など「だれ一人取り残さない」という考え方を共有することができた。それは、この学習の中だけではなく、他の教科や領域、日常生活の中にも波及している。

１月の「ステナイ生活（不用品回収）」を実施後、持続可能な社会のつくり手育成に向けて、意欲を高めていきたい。

横浜市立並木中学校
学校教育目標「共生　～仲間とともに高め合える人～」
ＥＳＤを通して育成したい資質・能力
道徳や特別活動、各教科との関連性を重視しながら、問題解決的・体験的学習に取り組み、持続可能な社会に向けて、問題解決能力やコミュニケーション能力を育成することを目指す。

１　ＥＳＤを通して育成したい資質・能力の具体　　は連携・協働のパートナー

【１学年環境学習】

【１学年福祉体験学習】

【２学年平和学習】

【２学年職場体験学習】

「共生　～仲間とともに高め合える人～」のという学校教育目標から
　○気づき、考える力
　○先を見据えて行動する力
　○発信する力・伝え合う力
という育成したい資質・能力を設定した。
それを、「総合的な学習の時間」を核として、道徳や特別活動、各教科との関連性を重視しながら、問題解決的・体験的学習に取り組み、持続可能な社会に向けて、問題解決能力やコミュニケーション能力を育成することを目指した活動を行っている。

○総合的な学習の時間

【１学年】

目標	環境や福祉の目標に視点を置き、身近なSDGsの取組を知ることで、課題を自分事と捉え、将来自分はどのように目標達成に貢献できるかを考えることができるようにする。
具体	環境学習（横浜環境保全） 福祉体験学習（金沢スポーツセンター） 人権作文・国際平和スピーチコンテスト

【２学年】

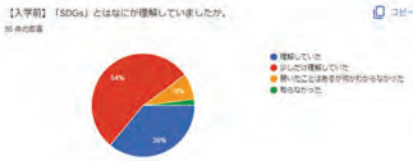
目標	人権や平和、経済や産業の目標に視点を置き、働くことの意義や持続可能な経済成長が実現できる社会に向けて自分ができる取組を考えたり、職場体験を通して感じたこと自分の進路選択に生かしたりすることができるようにする。
具体	平和学習/校外学習（国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館） 職業講話/職場体験学習（地域企業・高等専修学校） 人権作文・国際平和スピーチコンテスト

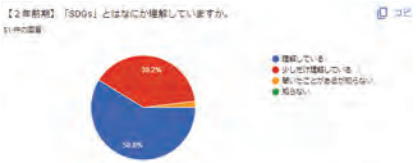
【３学年】

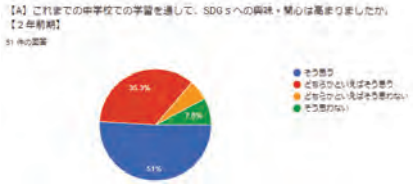
目標	誰もが安全・安心に暮らせるまち、伝統や文化の継承の目標に視点を置き、修学旅行や調べ学習を通して学んだことを積極的に発信できるようにする。
具体	修学旅行（木場潟公園東園地） 進路学習 人権作文・国際平和スピーチコンテスト

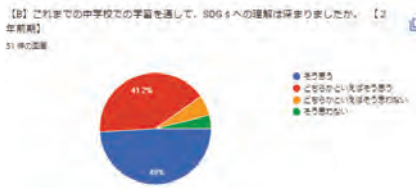
２　地域や企業、ＮＰＯなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

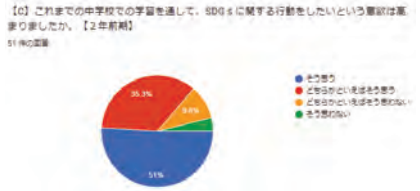
【平和学習の振り返り】











３　ＥＳＤの価値を引き出すために試行錯誤したこと

本校は３年前から SDGs に関連付けた学習を始めた。今回は、２年生の取組にフォーカスをして、平和学習後に「SDGs への理解・説明」、「学習を通しての考え」の変容をみるために Chromebook を活用して学年全員にアンケートを実施した。

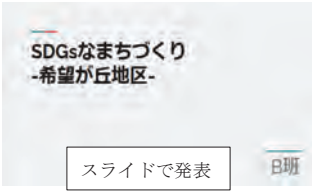
４　学校全体（ホールスクール）でＥＳＤを取り組むことによって引き出すことができた価値

アンケートの結果から、１年生で学んできた SDGs への理解が生徒の意識の中では深まっているように感じる。生徒たち自身に「行動宣言」という形で、自分に何ができるのかを考えさせた。学習直後は、行動を起こそうとする姿勢が見受けられた。今後、後期の職場体験学習後にアンケートを実施し、育成を目指す力と生徒の実際の乖離を縮めていきたい。

今後２年間で、さらに学びを充実させ、そこから生徒がどのような価値を見出していくのかを研究していきたい。

横浜市立希望が丘中学校
学校教育目標「 人を愛し、人に愛されながら、夢や目標をかなえるために」
ＥＳＤを通して育成したい資質・能力
「課題解決能力」「仲間と協働する力」「世界の問題や課題に目を向ける力」

１　ＥＳＤを通して育成したい資質・能力の具体（例）　　は連携・協働のパートナー



福祉厚生委員会

【フードドライブ活動】

福祉厚生委員会が中心となって、周知活動、当日の回収活動、結果報告を行った。特に周知活動では、ポスターだけではなく、PR 動画を作成し昼食時に流した。集めた食料品は資源循環局によって回収され、フードバンクに寄付された。生徒たちからは、周知方法への反省点が多く上がった。

【服の力プロジェクト】

昨年度の ESD 推進校児童生徒交流会の情報等をもとに、今年度からUNIQLOの「服の力プロジェクト」に参加した。事前授業は、家庭科にて衣生活の授業をしていた一年生を対象に行われた。実際に届けられた服を着ている姿や服を必要としている人たちの声を聴いた生徒たちからは「誰かの役に立つのなら協力したい」というような意思や「難民」の存在に関心を向ける姿勢が見られた。

その後、福祉厚生委員会が中心に周知活動や回収活動、服の整理・梱包作業を行った。周知活動では、フードドライブ活動で出た反省を生かし、宣伝期間や回数を増やし、PR 動画の内容を端的でわかりやすくキャッチーなものにする工夫を行った。また、チラシを配布するだけではなく、配ったチラシの注目してほしい部分を各クラスで説明し、自分で線を引いてもらい参加意識を高めた。

当日は、中学生だけではなく小学生や地域の方々も多く参加した。宣伝の効果もあり、最終的に 1,957 着の服が集まった。また、この活動を横浜ケーブルビジョンに取り上げていただき取材も受けた。前回の活動の反省をもとに、よりよい活動を自分たちで作ろうとする姿勢が見られた。

３年生　総合的な学習の時間

３年生の総合的な学習の時間で、「これから先、生きていく社会が持続可能であるための、自己の生き方・社会との関わり方を理解する」という単元目標のもと、「理想の希望が丘地区」について各学級で SDGs の視点を交えながら、調べ学習を行った。

まずは地域の特徴を捉えるために、班ごとに希望が丘地区の良いところや課題をまとめた。また、旭区の人口推移についても触れることで、今後の希望が丘地区の状況を予想し、そこから課題設定・探究・まとめ発表と行った。

地域の魅力を理解し、住み続けられる理想の街にしていくために、SDGs の視点をもち一人ひとりが前向きに取り組む姿勢が見られた。

２　地域や企業、ＮＰＯなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1) 当事者意識の芽生え

教職員による説明ではなく、UNIQLO の職員による出張授業を受けた。普段学校では出会えない大人からの説明だったことで、生徒はいつも以上に真剣に話を聞いていた。また、UNIQLO の職員から、ボランティアに参加することの意義や必要性、どのように役立つのかを直接聞くことで「自分も協力しよう」「力になれるかもしれない」といった当事者意識が授業後のアンケートから見ることができた。

(2)　活動範囲の拡大

中学校の中で活動することがほとんどだったが、「服の力プロジェクト」や「フードドライブ活動」を通して、地域の方とのつながりが生まれてきた。生徒の話し合いの中で、周辺の小学校や地域の方々のことが出てくるようになり、地域の一員としての意識をもつ第一歩を踏み出し、良いスタートが切れていると感じた。

３　ＥＳＤの価値を引き出すために試行錯誤したこと

(1) 活動の振り返りを次につなげるよう促す

「服の力プロジェクト」や「フードドライブ活動」のように、取組が異なったとしても周知の方法や話し合いの進め方は同様である。そのため、振り返りの際に、次の活動の計画を立てさせるようにした。定例の委員会活動日は月に一度しかないため、活動への意欲が冷めないうちに話し合いをさせることで、より具体的な改善方法が出せた。

(2) 各教科等との関連を図る

今年度から、各教科等の単元と SDGs の目標を関連付けて授業を行うようしたため、委員会での活動も授業との関連を図るよう心掛けた。例えば、「服の力プロジェクト」は家庭科の衣生活に関する授業と関連付けた。一年生に、「自分のクローゼットの中身を衣替えし、要らない衣服と必要な衣服を分ける」ことを夏休みの課題として出していたため、それに合わせて夏休み前に出張授業を行い、内容をリンクさせた。授業と関連づけることで、より SDGs が自分たちの身近にあることや、自分たちの行動が課題解決につながっていると認識させることができた。

(2) 縦割りでの活動

仲間と協働する力を養うために、委員会活動では、学年の壁を越えて活動に取り組ませた。準備の段階から学年バラバラに席を組ませ、互いの意見を受け入れ、協力して活動を進める姿が見られた。下級生は小学校での活動を参考に意見し、上級生はそれをくみ取りつつ、上級生としての視点で話を進めることで、横のつながりだけでは生まれなかった新たな気付きを生み出すことができた。今後も学年問わず、他者と協働して課題解決する力を育てていきたい。

４　学校全体（ホールスクール）でＥＳＤに取り組むことによって引き出すことができた価値

(1) 生徒の SDGs への関心の高まり

今年度から、各委員会の年間目標に SDGs の目標を紐づけて活動を進めた。今までは生徒会本部のみが、SDGs を意識した活動をしていたが、全委員会が紐づけたことにより、SDGs の認知度や関心が高まる様子が見られた。今年度は、福祉厚生委員会が中心となって全校に向けての活動を行ったが、来年度は他の委員会の活動も全校に広げていきたい。

(2) 教科等横断的な活動の広がり

家庭科や保健体育科など様々な教科等の学びを委員会活動に結びつけて考え、学びを深めることができた。学んだことを目の前の課題解決に生かしていく力を育てていきたい。

横浜市立義務教育学校緑園学園
学校教育目標「真のグローバル人材に　　自主　協働　創造」
ＥＳＤを通して育成したい資質・能力
「協働する力」「課題解決する力」

１　ＥＳＤを通して育成したい資質・能力の具体（例）　　は連携・協働のパートナー

８年　三崎中とのＳＤＧｓ交流会

野球部　部員による活動の意義づけ

食育サポーター　食育とＳＤＧｓ

８年生　「総合」
「海の豊かさを守ろう　地域のＳＤＧｓ」

昨年度（７年次）より３年計画で取り組んでいる実践。７年次は「緑園地域のＳＤＧｓ」８年次は、「海の豊かさを守ろう」を中心テーマとして取り組んでいる。自然教室の行程中に三浦市立三崎中学校との交流を組み込んだのが特長である。昨年度末に共通のテーマを設定し、オンラインによる交流を行った。それを受けて、本年は対面によるポスターセッションを行った。準備段階では、地域の方や近隣にあるフェリス女学院大学の学生の前で発表して、アドバイスや意見交換などを行った。また、義務教育学校の特色でもある、前期課程児童への発表も行い、校内での異学年交流にも生かした。

この成果を学校運営協議会で報告をし、地域の活性化委員会内にあるＳＤＧｓ部会と連携をすることとなった。緑園地域のＳＤＧｓを通して、生徒と地域の大人とが緑園地域の課題解決に向けて意見交換を行うことで、自分たちの考えが生かされる有用感を得ている。

野球部　「自分たちの活動について考えよう」

野球部顧問が部活動でもＥＳＤについて取り組めないかを考え、生徒主体の活動として取り組んだのが「野球部ＳＤＧｓミーティング」である。日頃行っている活動をＳＤＧｓの観点から見直すと、どんなことが見えてくるのかを顧問が部員に考えさせることで、部員自身が自分たちで活動に新しい価値を見出すという試みである。ＳＤＧｓを身近なものとして捉えるのに非常に有効的であった。この試みを学校運営協議会で報告することで、地域との連携が生まれた。使われなくなった野球道具の寄付（不平等をなくす）のお願いや、明治大学女子野球部・日本大学女子野球部との交流会への児童参加（ジェンダー平等）などは、多くの関心を集めることができた。

食育サポーター　「食の観点から考えよう」

食育実践推進担当とＥＳＤ担当とで協働した企画。本校の教職員が日めくり形式の掲示物を作成し、その後、他校の教職員とも協働して掲示物を作成・共有し、各校で掲示した。掲示物によって、生徒の意識を高めた後、校内で「食育サポーター」を生徒から募集し、教職員からインタビュー形式で食とＳＤＧｓとの関連性について情報を収集。その後、掲示物を作成して学年のフロアに掲示している。生徒たちは教職員それぞれの回答から多面的な見方・考え方に触れることができている。

２　地域や企業、ＮＰＯなどとの連携・協働により引き出すことができた価値

(1)　本校の現状

開校２年目となり、教育活動の中身を充実させたいという教職員の機運が高まってきている。そのなかで、本校の教育活動の柱の一つである「ＥＳＤ」活動を充実させるため、教職員一人ひとりとの面談を通して「一人１ＳＤＧｓ」に挑戦することにした。学年や授業に加え、部活動や委員会活動など、それぞれの校務分掌において”Act Locally”が自分たちの身近なところに既にあることに気づくとともに、地域とつながる視点をもつなど活動の幅が広がっている。

(2)　連携することによる変容

昨年度より先行実践していた８学年は他の中学校や大学との連携結果を学校運営協議会で報告をし、地域との連携につなげている。

しっかりとした目的意識をもって地域との打ち合わせに臨むと、多くのメリットがあることに気づいた。特に企業や大学側は地域との連携を強く意識しており、児童生徒と関わる機会を探しているため、建設的な意見交換につながることが多い。生徒にとっては「普段接する機会のない身近な大人」と関われる機会であり、貴重な成長の場となっている。また、学校だけではお願いしづらいことも地域が率先して行ってくれるなど、教職員の意識向上にもつながっている。

（大学生との意見交換会の様子）

野球部では生徒達とのミーティングを通して、地域の方々に「使わなくなった野球道具の寄付のお願い」を行った。経済的な事情による競技機会の不平等をなくすため、集まった道具を部で使うのと同時に、海外への寄付にもつなげようと考えている。普段行っている活動に新しい価値を見つけることにつながっている。

３　ＥＳＤの価値を引き出すために試行錯誤したこと

(1)　「自分にもできること」を目指す。

本校には強力な推進者がいるものの、周囲が受け身の姿勢になっていたり、「自分にはあそこまでできない」と思っていたりする様子が見られた。そこで、今年度は一人ひとりの意識向上を目標に、自分にできるＥＳＤを考えてもらうこととした。ＳＤＧｓへの意識が向上し、ＳＤＧｓについて触れる教職員が増えれば、生徒もＳＤＧｓに触れる機会が増えていく。教職員の成長が子どもの成長につながってきている。

(2)　「生徒が成長する姿」をイメージする

アイデアを実行に移すまでには多くの課題がある。しかし、課題ばかりを挙げていては先には進まない。アイデアを積極的に認め、実現できる方向に考えていくことが重要である。中でも一番大事なことは、生徒がどのように成長できるかを分かるようにすることである。本校の取組の一つにペットボトルキャップアートの制作がある。前期課程の児童に、生徒がキャップを集める意義を説明し、一緒に制作するというものである。表現力や協働する力の育成がイメージとして分かるため、教職員からの協力もスムーズに得られたＥＳＤの実践である。

４　学校全体（ホールスクール）でＥＳＤに取り組むことによって引き出すことができた価値

(1)　課題解決力、協働する力の育成につながる

生徒の振り返りからは、地域や異学年との交流によって、課題に対して広い視野で思考すること、異なる立場の人たちと協働することの大切さに気付いたことが読み取れる。

(2)　自己有用感の育成につながる

生徒の考えや意見が地域の方や大学生、企業の方に共感されることが多くある。その経験が次への活動意欲につながっている。